

違っているかしら

森村 桂 著

ORION きらめく星・心に灯をともす書 BOOKS
☆☆☆ ☆☆☆

読者の皆さまへ

この本をお読みになって、どのように感じられましたか、それをぜひおきかせ頂きたいと存じます。わが社がどのような本を企画すべきか、どうしたら愛読者の皆さまに出版奉仕ができるか、その貴重な参考といたしたいと存じます。

オリオン・ブック스가、夜空に美しくきらめく星であり、人の心に灯をともす良書たらんことを念願するわが社のモットーを完全に生かすためにも、愛読者のご忠告やご意見は金言であると存じます。

ぜひお教え下さい。

オリオン社

違っているかしら

昭和40年10月20日 印刷

定価 350円

昭和41年 8月15日 17版

著者 承認 検印 省略

著者	森	村	桂
発行者	宮	本	孚
印刷者	壮光舎印刷株式会社		

発行所

東京都中央区銀座東2-11

株式会社 オリオン社

電話 代表 (541) 3821・振替 東京79291

落丁・乱丁は本社でお取替えいたします

違っているかしら

森村 桂 著

目 次

目次

I 会社ってなんだろう

三つ子の魂……………	8
国文科女子お断り……………	15
とんちんかん問答……………	19
生れて二度目の試験場……………	22
小手調べの入社試験……………	28
これが新聞社？……………	34
社長さんとの秘密……………	42
学習院がハチ合わせ……………	46
新薬の発明者に……………	52
女子大生でなければ、女に非ず……………	57
あらゆるコネを総動員……………	63
給料よりも入ること……………	69
落ちて声なし……………	76
親友コダとの会話……………	82
舞込んだ脅迫状……………	87

憧れの出版社に決る..... 93

Ⅱ 私 は “ 社会人 ”

新米社員の第一日..... 98

しつこい女の好奇心..... 103

初仕事は映画批評..... 107

こんなはずじゃない..... 113

通して下さい卒業論文..... 120

社内のモヤモヤ空気..... 128

プラン、原稿すべて採用..... 136

チャンス到来！..... 146

正社員になれると思えば..... 153

キャップの名は “ 殺し屋の鉄 ” 158

社長に直接談判..... 162

ああ、わが百十一人の推薦者..... 168

乾杯しよう、川瀬君..... 175

空しい卒業謝恩会..... 179

川瀬君の本音..... 186

就職よ、お前は一体なものだ..... 191

Ⅲ 私のモノサシは違う

なんとか社長に会おう.....	196
むずかしいミソ汁の味.....	202
社長が牛乳をくれた.....	212
いざ実力の見せどころ.....	218
異名「コワシヤのケイ」.....	225
テンカンと脚気.....	236
太陽は真上にきた.....	243
ここだけが社会じゃない.....	253
社長、すみません.....	260
私は大編集長の後継者.....	266
未知の世界を歩きたい.....	273
さて、これから.....	280
あとがき.....	289
森村 桂	

違
つ
て
い
る
か
し
ら

森^{もり}

村^{むら}

桂^{かつら}

I 会社ってなんだろう

三つ子の魂

会社に勤めようなどという気を起こしたのが、そもそもの間違いのはじめだったのかも知れない。三つ子の魂がどうのこうのというが、そのデンでいくと、私は決して、会社に勤めるなどということをしてはならないはずだった。

小さい時、どうしても不思議でなかったこと、それは、よく友だちやいとこのお父さんが、

「会社へ行く」

ということだった。

「会社ってどういうところ？」

「大きなビルディングなんだよ」

「そこで何するの？」

「お仕事するんだ」

「なんのお仕事？」

「そうだね、書いたりね」

「じゃ、うちのお父ちゃんと同じこと？」

「うん、計算したりもするんだよ」

「じゃ、算数の先生と同じこと？」

「生徒はいないんだ。えらい人は、同じぐらいの人や、いっぱいいるんだ」

「みんな、何してるの」

「そうだね、書いたり、ハンコ押したり、計算したり……」

「なんで？」

「おじさんは、バスの会社につとめてるんだよ」

「運転手さん？」

「いや、運転はしないんだ」

何がなんだかわからない。バスの会社なら、運転手と車掌がいればいいはずだし、電車の会社なら、キップを売る人、切る人、ピーッと笛を鳴らす人がいればすむ。キャラメルのは、キャラメルを作る職人、それに売る人があればいい。

「会社」というものは、どういふところなのだろう。

それらの仕事とは別に、会社というビルディングがあつて、「会社」という名のもとに、何やら、

書いたたり、計算したり、いっぱい人がいるという。いったい、彼らが何のために、そんなことをしているのか、わからなかった。ずいぶん多くのおとなたちが、無駄なことをしに行ってるものだなあ、と思っていた。

あいにく父は、小説家だったから、かなりおそくまで、“会社”なるものを、私は理解しないでいた。それに、私たちの小さかったころは、会社員になりたいなんて、希望をもっていた子どもはいなかった。軍人になりたい、バスの運転手になりたい、お菓子屋さんになりたい、お姫さまになりたい、そんな夢だった。そして私の持った夢、それは、父の話してくれた天国にいちばん近い土人の島へ行って、土人の子供たちとヤシの実の水を飲んだり、丸木舟に乗って魚つりをしたりしてくらすことだった。会社などという、不可解なところを、だれも、憧れたりしなかったのだ。

しかし、この世の中、そう、幼い夢が叶^{かな}うワケではない。それを生涯の仕事と思わなくとも、“会社に入る”ということは、かなり安全な道である、特別何の才能ももたない者であってみれば、なおのこと、何とか大学を出て、どっかの会社、それもなるべく大きな会社に、もぐりこみたいのが人情だろう。

昭和三十六年の秋、私も翌年の卒業をひかえて、それを真剣に考えるハメとなった。実際のところ、それを生涯の仕事と思ったわけではない。そんなに思いつめるほど、しなかったわけでも、しなければならなかったわけでもない。私には、会社に勤めるというよりほかに、もっとしたいことが、

しなければならぬことが、あるような気がしていた。

つい昨日まで、私には没頭している仕事があった。施設出身者たちのアフターケアセンター、私はその一員だった。孤児たちは中学卒業と同時に、それまで育った施設を出なければならぬ。そのほとんどは住み込みで働くのだが、勤め先がつぶれ、あるいはいやになり、病気になる場所、もはや、まへの施設にもどってくることは出来ない。中学卒業以上の人は世話を引受けないきまりなのだ。帰る家も、頼る兄弟もなく、少年たちはその心細さと身軽さのために、ちょっと不満が出来ればその勤め先をやめ、転々と職をかね、三十歳になっても、アパート一部屋借りられない。あるいは悪い友だちが出来ておちて行く。アフターケアセンターとは「それではいけない。少年たちの帰る家をつくらう。病気ならば寝かせてやり、職がなければ職を探してやらう。そしてもしよそに行きたくなければ、センターの中でも働けるようにしよう」と、ある神学校の先生が、その職をなげうって、施設出身者たちを集めて数年がかりでつくりあげた、そのセンターのことである。

今ではそのセンターは三十人の少年たちを泊め、洋服屋さん、工場の下請け、それに廃品回収業で資金をつくり、日本中からたよってくる施設出身者たちの就職や病気の世話をしている。

大学に入ってから、手芸品を集めてバザーを開き、将来孤児院をたてようという会を作り、はりきっていた私は、今年の正月、このことが報道された週刊誌を読んで、このセンターを訪れた。センターのリーダーは、男の子の方は問題ないけれど、女子の奉仕者がいないので、女の子を泊めることが

出来ないため、みすみすおちて行く女子を救うことが出来ない。それにもし、女子部も出来れば、日本で唯一のセンターになるから、財団法人としてみとめられて、都から補助もくるようになる。山形から松本さん、大阪から近田さんという、やはり若い女性が手伝いたいといっているが、その人たちと一緒に、女子部を作ってくれないかといった。

思ってもいないことだった。私は家庭教師のアルバイト、文芸部や演劇部、それに、この手芸バザーの会で手いっぱいだし、ずっと将来ならともかく、人を助けるなどということは、二年前父が死んでなおさら貧乏になってしまった今、精神的にも物質的にも、むりであった。しかし、そのリーダーの熱心さ、それに松本さん、近田さんに会って、私は心を動かされた。二人とも、やる気と身体より他に持たない人たちだった。

幼い頃、気の毒な孤児の物語を読んで涙を流し、将来大きくなってえらくなったり、金持になったら、こういう人たちを救おうと思っていた。そして、今の私も、その幼い日の心はまだ残っている。だから、将来孤児院を建てるための資金づくりを手芸バザーによってしているのだ。けれど、この時私は思った。十年先、二十年先のことなんて、約束出来ない。えらくもお金持にもなれないかも知れないし、なれたときは、めんどくさくなったり、欲ばりになってるかもしれないもの。困ってる人はいま現にいるのだ。私はこの手芸バザーの会をつづけながら、センターの女子部をつくる一員になるうと決心した。私の家にほど近い四帖半のアパートを借りて、女子部は発足した。

少女たちがやってきた。職場をとび出して来た娘もいれば、病気の娘もいた。なかには、私たちの手におえない女の子もいた。しかし、三人は一生懸命に働いた。どこから資金が出るわけでもない。アパート代から食費、足代、医者代、すべて自分たちで働かねばならなかった。松本さん●近田さん、彼女たちが生活するだけでさえ、お金はかかる。だから二人は、夜も働きに行かねばならなかったし、私もアルバイトをふやさなければならなかった。とくに、彼女たち二人の働きは目覚ましかった。夏の暑いさかり、上からどんどん落ちてくる廃品の山の中で、汗とごみだらけになりながら、気にもせず先にたって働いていた。私はおもに少女たちの職さがしをした。

そんなみんなの働きの、実る日がやって来た。ついこの間、財団法人になることがきまったのである。翌日、私たち女子部は解散した。これで仕事が終わったのではない。これからであった。しかし、私と松本さんは知っていた。二十五歳の近田さんが、もう一度発作を起こしたら命にかかわるということ。

近田さんは、ここへ来る前から、すでに病気だった。それを隠して、少女たちの世話をし、資金を得るために、昼間も夜も働いていた。なんども発作を起こしながら、彼女は入院をこぼんだ。その彼女が先週末倒れた。今は入院中なのだった。退院してくれば、いや面会謝絶の札がはずされれば、すぐ彼は帰ってくるだろう。私たちは彼女がこの仕事に入るために別れたという、大阪からやって来た婚約者に彼女をたのみ、いそいでアパートをたんだ。松本さんはお姉さんの経営している理髪店に

いった。

私たちの情熱が消えたわけではない。しかし、このままいつてどうなる。この仕事はもっと大きくなるかも知れない。しかし私たちまで成長するわけではない。おばあさんになって、もうセンターにいらなくなりながら、行き場がなくて、むかし私たちが働いてこれだけに、したんだと、しがみついているのは、あまりにもみつともない。

財団法人になれば、資金も来やすいし、よい奉仕者も来る。この際、私たちは解散して、自分たち自身を救おう。十年、あるいは二十年、それぞれの道を歩んで、そしてまだ私たちが必要だったら、その時帰ろう。私たちもそのころは、もう少し太っているにちがいない。今は、人を救うどころではなかった。まず、私たち自身を救うこと、それがどんなにむずかしいことか、それを知ることになってきていた。もしかしたら、私たちは、自分自身さえ救えないから、そのごまかしに、こういう運動をしているのではないか。そんなことを思う日が、このごろ多くなつたのである。

さて、一人になって、何をしよう。そう考えた時、学習院の国文科の学生で、別にこれといった技術も、才能も持たない私は、「会社に勤める」ということ以外、なかったのである。こんどは、自分のための職探しとなったわけであるが、その救うべき相手が、私自身であつてみれば、これがいや、まことにむずかかったのである。

国文科女子お断り

しばらくぶりで学校に行き、「求人」の掲示板の前に立った私は、思わず息をのんだ。

九月も二十七日ともなれば、一流会社は全部締切りを過ぎていた。そればかりか、国文の女子に対する求人は、一般会社は全部アウト、締切りになったのもいれて、出版社が三社しかない。

出版社なら、私の入りたいと思う婦人文化社は、どこを探してもなかったし、せっかくカードのきている独創社は、女子お断りである。

一体これはどうしたワケか、締切りを過ぎてしまったのは、こちらが間抜け、文句をいうべきすじあいではないけれど、なんで一般会社は国文の女子お断りなのか、よく、一流会社のくせに口のきき方がわるいとかいうけれど、そんなことは、国文の女子を入れれば解決がつく。

それにあの公文書とやらの、何とも読みにくい文章。国文を入れないからだ。

でもまあ、いちいち文句をいつている時間はない。ともかく、試験を受けさせてくれるところは、この三つの出版社しかない。出版社は他にいくつもきているのに、どれも女子お断りとは何事ぞ、本は女も読むのだ。その出版社が女子はいれないと知れば、国文の女子が、本を買ったかね。タイプ、速記のできる女子だけオーケーして。冗談じゃない、こんなことは、入ってから習える。なにも大事